

Ⅶ 「情報ボランティア」による地域コミュニティの活性化

「情報ボランティア」が単にパソコンに関するボランティア活動にとどまらず、その活動から地域コミュニティの活性化へもつながる可能性を持つ。『とちぎITプラン』（平成15年9月策定）では、「情報ボランティアを養成、登録して、公民館や図書館等で実施するIT講習会の講師として派遣するなど、活用を図っていきます。また、障害者のためのパソコンボランティアの養成、派遣を行います。（中略）市町村の職員自らが、地域ITリーダーとなり、地域のIT化を先導しながら、障害者や高齢者の社会参加も促進し、地域コミュニティの活性化を進めます。」と目標をあげている。具体的に、考えられる地域コミュニティの活性化を次にあげる。

（1）パソコンをとおした子どもと大人の世代間交流

パソコンが近年急速に普及した。『平成15年度版情報通信白書』によると平成14年度末現在「世帯における情報通信機器の保有率はパソコンの世帯保有率は、71.7%（対前年比13.7ポイント増）」となり、一般的な家庭電化製品となってきた。家電品とは言ってもテレビを見るようにはいかず、扱いにくいものである。幅広い年代の「情報ボランティア」の活動がパソコンの楽しみを、学校、家庭、地域に広げる一助となり、パソコンがある意味世代間を超えた共通言語となりうるのである。

（2）地域のコミュニケーション活性化（情報の受信者から発信者へ）

高速通信回線の普及等により、ホームページでの情報発信が身近なものとなった今日、「情報ボランティア」の活動が活性化することで、情報の流れが大きく変わるものと思われる。

情報は水のごとく上から下へ。全国から地方へと流れてきていたが、インターネットの普及により誰もが、情報発信者となるようになった。地域の情報を集め全国へ発信。同時に、そこに参加する地元の人も地域を見直すことで、新たな交流の場ができる。その情報発信をするためのサポート役が「情報ボランティア」の活動のひとつになるのである。

（3）個人のキャリア開発

「情報ボランティア養成研修」受講後、「非営利団体 アイラボ」のように、ボランティア団体からNPO認証団体をめざすグループも出てきた。パソコンのボランティアの養成は、初心者向けのサポートを活動の目的として実施しているが、その理由の一つは、民間圧迫の回避である。パソコンの入り口付近で悩む人たちの支援をボランティアが受け持ち、それより上のスキルや、仕事に直結した部分については民間企業の部分である。逆に言えば、民間企業とボランティアの差が少ない分野ともいえる。とはいえ、個人のキャリア開発までつなげるためには大変であると思われるが、今後楽しみな分野である。